

# 昭和三十年代の安部公房短編作品について (二)

—日本の共同体への帰属と脱出—

小林 治

## 3

次に、安部が個人と共同体との関係をテーマに据えた昭和三十年代の短編小説の初期の作品の一つとして『鏡と呼子』（昭和32年1月「文芸」）を取り上げる。

さて、『鏡と呼子』には長く農村の村落共同体に属していた家から兄弟や息子が家出してしまい、残された家を守っていた年寄りが死ぬと、再び彼らが戻ってくるという小説の枠組みが与えられている。実はこの枠組みは、実質的な小説デビュー作『終わりし道の標べに』（昭和23年9月真善美社刊）以来、久方振りの長編となった『飢餓同盟』（昭和29年2月書下ろし）の次に安部が構想していた長編小説——つまり長編小説の第三作目——に与えられるはずだった。安部は『文芸日記<sup>1956</sup>』（安部公房全集第五卷所収）の1月2日の記述の中で、今年の仕事の第一に「1 富士山のジャンヌ（仮題—長編）」を挙げていて、「とにかく今年は、「富士山のジャンヌ」を完成しなければならぬ。」と述べている。

また、同年の2月に発表された針生一郎との対談『解体と綜合』<sup>1</sup>でも、針生の問いかけに対して次のように答えている。

針生

ところが、『不良少年』、『飢餓同盟』でもそうだし、最近の戯曲なんか見ても、封建的なもの、ゆがんだもののなかにじかに踏みこんできた感じだね。解体する人間の最も無気力なもの、そこに新しいエネルギーに転化しうるものを探し出そうとするところに、問題が来るんじゃないか。

安部

いま農村の問題にとっても興味を持つてるんだよ。今度、富士をテーマにするやつも、新しい意味の農村小説が書けるんじゃないかという気がしてる。面白いよね、農村はね。君は外からと言っただけ、外にいるやつはやはり中から出て行ったんだよ。家出息子が戻ってくるんだ。

農村の「中から出て行った」「家出息子が戻ってくる」「富士をテーマにした小説を書くとしているわけだが、さらに『安部真知宛書簡 第2信』（昭和31年5月12日と記され、国民文化会議の代表としてチエコ作家大会に参加し滞在していたプラハから妻宛てに発信）でも、「ぼくは帰ったら、やはり例の富士山の小説を書くつもりです。日本をはなれてみて、その必要性が、十倍もよく分りました。」と書いていて、その意気込みから6月の帰国後に、いよいよその構想を具体化させるものと予想させる内容となっている。

しかし、現実には同年の秋に「来年上半年期の仕事は、まず、群像の連載、——中略——群像の小説は、一種の新しい冒険小説で野心作なんだ。」（『きょうこの頃』昭和31年11月13日号『産経新聞』インタビュー記事）に変更されてしまい、実際、翌32年1月から四ヶ月にわたって『群像』に連載されたのは『けものたちは故郷をめざす』であり、その内容から言って以前の構想は断念され、新しいものに取り換えられたのである。そして、それと全く同時の32年1月に『鏡と呼子』は発表されている。つまり、この一連の経緯からわかるのは、「家

出息子が戻ってくる」「富士をテーマにした長編小説は断念され、替わってその構想の一部が短編『鏡と呼子』に残されたことだろう。第三作目の長編小説のテーマとも意気込まれていたものがいったい何であったか、そして、にもかかわらず断念されたかということも含めて、『鏡と呼子』を考えてみよう。

作品の主人公は「町から来た若い教員」のKであり、以前の赴任校の小学校で「校長と喧嘩」して「田舎に転任になつて」「村の入口の橋のもとに立つところから作品は始まっている。橋の脇にある村役場には「窓からのぞいていた沢山の顔」があつて、Kが顔をあげると「急にひっこむことから、彼が村人の注目を集めるよそ者であることがわかる。彼を出迎えたのは村の小学校の「臆病そうな小男」の校長で、さびれた店が何軒かと「あとほつと農家があるだけ」の「あまりまつすぎで、距離感が狂ってしまう」村のメインストリートを、はるかに小学校へ向けて二人で歩くことになる。その道すがら、よそ者のKは校長から次のことを言われる。

「なぜか、若い連中の家出が多くてねえ……新聞地で、べつに古いしきたりにしぼられるというわけでもないのに、どういうわけか、しょつちゅう家出がたえません……栄えていた家がつぶれたり、跡目がいなくなつて家系がたえたり……どうも、うしろで、誰かそそのかしをやっているものがあるんじゃないかと、そんな噂もあつたりするんでねえ……」

この校長の新任教師に対するいきなりの「忠告」は、明らかに「村の若い連中」に進歩的な考え方や、村外の世界の様子などを吹き込んでもらつては困るのだということを先手を打って釘を刺している。むろん、Kは「妙な言いがかり」として反論するが、むしろ「村の若い連中」が「家出にたいする共鳴」を持っているというところを知って、内心「村の若い連中」と「むすびつくよりどころ」を発見できたように感じ、そこに新たな

自分の赴任後の役割を見ているのである。村の改革に燃えてやってきたというわけではなく、失意しかなかったKを、逆に目覚めさせたと言える。

だが、校長はそのようなKの思いとは別に、勝手にKの下宿先と決めていた阿瀬宇然なる人物の家の実情を語ることで、さらにその「忠告」の根拠を示していく。

「あの男も、昔は村長までしたことがあるくらいだね。学問もあり、信望もあったが、あれやこれやですっかり落ちぶれてしまつてなあ。」

—中略—

「つまり、そのあれやこれやというのだがね、やはり、言ってみれば家出のぎせいなんですねえ……もうかれこれ三十年も昔のことになるが、宇然の兄貴に卓見というのがおつたがな、それがまず姿をくらましおつて、人さわがせをしたもんだが、血のつながりというのか、どういうのか、こんどは自分の一人息子の天地に逃げられてしまつてな……そう、あれはまだ戦争がおわつて間もないころだったが、あれ以来急にがっくり気落ちしてしまつてなあ……」

かつての村長までもが「家出のぎせい」となつて「落ちぶれてしま」つているのだという校長のたび重なる「忠告」に、Kは「じつに不愉快ですね。」と厳しい対立を際立たせ、「はげしい苛立ちにおそわれ」、「もう、後にひけない」と思いこんでいく。最初の出会いでのこれ以上の決定的な対立を避けた校長が、いつものように綿羊を連れて小学校に来ていた阿瀬宇然の姉の阿瀬トクに、Kを阿瀬の家まで案内させる。そこには阿瀬宇然が待っているのだが、この宇然の異様な行動こそこの短編の特異性と、そのテーマを象徴している。宇然は「羊羹色の詰襟を着た五十がらみの男」なのだが、最初にKを見ると次のような行動に出る。

どこから持ちだしたかひどく旧式の三段式望遠鏡、というよりむしろ遠眼鏡といったほうがふさわしいような代物を眼にあてがつて、じつとこちらをのぞきこむのだ。十メートルとはなれてはいないのに、なんておかしいなことをするやつだろう。

—中略—

男は二、三分のぞきつづけていた。それからふつと何処かに消えてしまった。

見ることでできる対象物全てを望遠鏡を通してのぞき込もうという宇然の奇行の意味が、Kには理解できず、その後、宇然も毎日、朝早く家を出て、暗くなつてから帰つてきてKとは話もせず、そのことにふれようともしないので、そのままになるのだが、一週間後の放課後、「同僚の中で世話係のような位置にある千見という社会科の教師」が親切心から教えてくれる。

「毎日、どういふことをしているんだと思います？……山にのぼつて、望遠鏡をのぞいているんですよ。山つて、あの通りのつきあたりの、石灰山のことですけどね。」

—中略— 坐りこんで、朝から晩まで、こう、望遠鏡でのぞいているんですよ。

—中略— それも、いっぺんのぞきだしたら、もう絶対に眼からはなさないつていうくらいで、実に病的なんだな。原因は、天地とかいふ息子さんの家出かららしいが」

なじめない同僚たちの余計なおせっかいに腹をたてつつも、教えられたことによつてやがてKに大きな変化が生じる。

ところが、歩いているうちに、ふと自分が正面を向けないでいることに気づいたのである。一度、意識すると、その気がかりなものは急速にひろがりはじめた。自分を見ているかもしれない宇然、その宇然に見られているのかもしれない自分—そんなふうを考えてみると、まるで体の内側がつっぱってぶつかり合うような、奇妙なきこちなさに、おそわれてくるのだ。

ついで常に誰かに見られているなどと意識したことのなかったKが、宇然によつて昼間は観察されていると知らされ、急にどうにもならない「奇妙なきこちなさ」に苦しみ始めるわけである。この一方的に見られるだけで、自分からは見返すことができないという視線の位置関係は、通常の間関係を作り立たせているところの、互いに量の多寡はあつても原則としては見ることは見られることと同義という原則を完全に覆している。それゆえKはその事態を受け入れられず、混乱するのだろう。(このエピソードは、安部の後年の長編小説「箱男」(昭和48年3月)のダンボール箱の中に入って移動し、一方的に見るだけで見返されることのない視線を獲得して「胡散臭がられ」ている箱男をも想起させる。)半月後、K自身が動揺の收拾のためには、自らも宇然のように望遠鏡で一方的に見るだけの体験が必要と考え、思いきつて宇然に頼みこんで見せてもらい、ようやく落ち着く。しかし、Kは改革者としてこの村にやつてきて「校長をやつつける計画」を持っているはずだから知らせておくべきだという千見たちの勝手な思いこみから、宇然の異様な行動の裏側に隠された閉ざされた共同体としての村を維持している仕組みを知らされて再び混乱する。それは実は、「家出亡国論」という校長の思想」に基づいて、家出を阻止すべく宇然が「家出監視人」として村で起きるあらゆる現象をスパイして、その情報を流しているというのが一つ。もう一つは、共同体維持という名目の裏で、鏡と呼子を使って商売として家出とは直接関係のないあらゆる私的な情報を売って利益を得ているということである。

婆さんに山から合図を送るんです。晴れた日には鏡の反射で、曇った日には呼子の音で……だから婆さん晴れた日以外には絶対に外出しません。家にいて、呼子の音を待っていないければなりませんからね。

—中略—つまり、要するに、情報屋なんですよ。誰の家で今日は何俵脱穀したとか、試験所前から三時のバスで誰がどこに行つたとか、誰と誰と一緒に歩いてきたとか、巡査が誰の家に何時間上りこんでいたとか……それで結構、百姓の中にはこの宇然情報のほうを、新聞ラジオよりも有難がつているやつがいるんだから。—中略—婆さんは、その情報に応じて適宜、金品をもらい、それがもう相当なたくわえになっているということですよ。

このような意味とからくりを持つ宇然兄妹の異様な行動は、共同体としてのこの村をバランスよい形で閉じる役割を果たしているだろう。かつて宇然が村長をしていた戦後間もない時期に、兄と息子が続けざまに家出し、他にも多くの家出人がたえなかつたという村落共同体維持の危機を受けて始めたと思われる宇然兄妹の行動は、今では村内に変化することがない強固な地盤を作り上げてその維持に役立っているのである。ところで、村全体を見渡すことのできる山の中腹に上つて望遠鏡で村全体を監視して、何かあればすぐに村に知らせるといふ宇然兄妹の行動は、後の安部の長編『砂の女』(昭和37年6月)での、「いつも誰かが、火の見から、双眼鏡でのぞいて」(第21節)村の秩序を保つていて、何かあれば「半鐘」で知らせる仕組みにつながっていることは注目してよい。

さて、村内に築かれた強固な地盤についての以下の千見の分析は鋭い。

「なぜ問題がおこらないかという理由ですがね、—中略—それはこの村が、一つは家出亡国論という校長

の思想、もう一つは阿瀬宇然という家出監視人、いま一つは猜疑亡者の底なしの胃袋という、実にうまくバランスのとれた三つの要素で、きっちり三角形の中にとじこめられてしまっていることだと思わぬです。なんともうまく出来た防波堤なんだな。どんな風が吹いても決して波がたたない。それがわたしらには絶望的にやりきれないことなんです。」

つまり、この村の日本的村落共同体としての閉鎖性、自己完結性は、校長の思想と、宇然の行動と、村人の猜疑心という三つの要素が調和して成り立っているということだが、ここでそれぞれもう一度検討してみよう。校長の「家出国論」の思想とは、思想なども含めた外の世界からの刺激などによって、共同体のありように疑問を持つなどのいわゆる目覚めた者が増えると、その維持が不可能になっていくという家出禍から村を護つていこうとする共同体維持の根幹思想たる理論であろう。また、家出監視人としての宇然の行動は、山の中腹から望遠鏡によつて村の中で起きるあらゆる出来事を観察して、家出などの村の秩序崩壊につながる事象をあらかじめ把握してそれを防ぐべく情報を村に流すという共同体維持のための情報収集であろう。さらに「猜疑亡者の底なしの胃袋」とは、「宇然情報」を手に入れて、互いにあらゆることに監視の目を光らし合い、何事も起きて即応できる態勢を持った村人たちの日々の生活（実践）を指しているだろう。この三者が、どれ一つ欠けることなく一体となつて作りあげているのが、三角形（三者）の防波堤によつて強固に護られた（閉じられた）日本の村落共同体ということの村そのものである。

さて、このように村の本質を鋭く分析できる千見ではあるのだが、それを踏まえていざ行動となると、「家出に本当の価値をみとめ、それを心から宣伝することなんか、とてもできない」「亡者の魔力を知りすぎている」「駄目ですよ、われわれには……」と「自嘲的に唇をゆがめ」るだけで、自らその「三角形の一边をこわして、バランスを破」り、「こつちから家出肯定論の攻勢にで」ることは決してしない。せいぜい「同僚をたずねるときは、なるべく月のない暗い夜をえらび、親しいもの同志でも、つれだつては歩かず」程度の保身に気を配るくらいである。千見の役割はあくまでも傍観者であり、ひたすらKに期待するだけなのだ。この絶望的な消極性ゆえに千見たちもまた三角形の防波堤の内側にいるといえよう。

これに対して、Kは村の完結した閉鎖性の全容を知ったこの時点からようやく猛然と行動を開始し、小説は急転していく。「なにかきっかけをつくらなければいけない——中略——とにかく、三角形をこわすのだ。青年の家出運動を組織して、三角形を破壊するのだ。」と決意して、宇然兄妹に「この村の家出をもつと盛んにするために、家出相談所つてのをぼくの部屋に開設しますからね、そのうち表に看板をかけさせてもらいますよ。」と「家出」黒い翼をはやしたこうもりども」を放つことを宣言するのである。これを聞いた宇然兄妹の驚きは翌日に早速、トクをして「宇然情報」配達の得意先に「あの、こんど来たK先生なあ、ありや悪いやつだぞ。家出をしようれいするのに、相談所をもうけるなぞとほざいとる。」と触れ回らせるのだが、その途中、小学校前で大型トラックにはねとばされて死んでしまう。この情報もたちまち村内に知れ渡り、その日のうちに親類たちが集まり始め、四日目には二十人あまりの五つの家族が宇然の家に集結して、弁当を届けにやつて来た千見を追い払い、Kを隅に押しやつてそれぞれ部屋を占領し、睨み合っている。彼らは、共同体の三角形の一边を成している「猜疑心の亡者ども」そのものであり、トク婆さんの遺産を目当てにやつて来たのである。意を決して行動を開始したはずだったKも、「トク婆さんは死んだ。それで三角形はどうなるのか？三角形は自分の足でここにやつてきた。千見を追いはらい、俺を締めあげ、おれのこうもりまでも食いつくしてしまったらしい」と不安にかられている。つまり、このトク婆さんの事故死によつて、共同体の三角形の一边がその獐猛さを剥き出しにし、いとも簡単にKが打ちこもうとした共同体破壊へのくさびを葬ったのである。

ここまで見てくると、この小説においてKに与えられた役割とは、自分で何に取り組むべきかの問題意識も持たずに閉鎖された村落共同体にやつて来た男が、時を過ごしていくなかでようやくそれを探り当て、いざ実

行に移し始めるとすぐにその共同体から猛烈な反撃を食らい挫折してしまうというものであることがわかる。ところでこの構図は、先にあげた安部の長編第二作目の『飢餓同盟』の中で、花井太助を中心とする七人の「飢餓同盟（ひもじい同盟）」員たちが辿った過程とほとんど同じである。地熱発電所を建設して、産業らしい産業のほとんどない町に革命を起こそうと画策した花井太助は、町の古くからの有力者である現町長の多良根たちにその計画を奪われ発狂してしまう。また、何も知らずに実際は実体のない町立診療所に赴任してきた森四郎も、町のもう一方の有力者である開業医の藤野健康たちの妨害で患者すら診ることもできず、「飢餓同盟」に加わるが、花井の発狂で同盟は解散となり、町を後にせざるを得なくなる。このように、共同体の閉鎖性に反旗を翻して行動を開始した者が、共同体の反撃であえなく挫折するという構図は長編『飢餓同盟』からそのまま持ち込まれたものであるわけだが、実は安部がそのようにしたことには伏線がある。これも、先にふれた針生一郎との対談『解体と総合』で、針生の問いかけに対して次のように答えた箇所がある。

針生 『飢餓同盟』なんかどうなの？分析がうまくいかないうちに、フィクションが壮大にひろがっていったような気がするが……。

安部 あの中に、ちよっとだけ元軍人―ファシストが出てくるだろう、最後にオートバイに乗ってやって来る。本当はあれが主人公だったんだよ。それがいくら書いても姿をあらわさず、どうしてあんなことになったのだろうね……。

確かに、『飢餓同盟』の第25節冒頭で「五十すぎた白髪の、みるからに精悍な男」が「サイドカーをつけた一台の大型オートバイ」に乗って登場し、眠っている花井が持っていた地熱発電に適した場所が記された地図を写真に撮って走り去っている。この男は「秩父地下探査研究所長」の秩父善良で、「飢餓同盟」員の一人の織木順一を、かつて鉱脈などを発見することのできる「地下探査技師」に育て上げ、ナチスにまで協力させていたとしているのだが、実際、彼が登場し、行動を開始することで「飢餓同盟」による地熱発電計画はあつてなく瓦解していくのである。『飢餓同盟』は26節までしかない作品で、まさに最後に「ちよっとだけ」の登場でしかなく、とても主人公とは読めない。しかし、24節まで積み上げられてきた「飢餓同盟」の計画を一挙に瓦解させるだけの推進力を持ったこの人物こそ、「飢餓同盟」のメンバーに替わって、もしかしたら共同体の閉鎖性に風穴を開けうる存在なのかもしれない。そんなことを思わせる人物なのだが、ほんのわずかの登場なのだからまさに安部も「どうして」と言うとおり『飢餓同盟』ではその人物造形ができなかったのである。よって、その残された課題を、次作の長編に持ち込んで、造形しようと考えたのではないか。次作とは先に述べたように、結果として『鏡と呼子』がそれに相当するのである。

とするならば、『鏡と呼子』で秩父善良に相当する人物が登場するはずだが、それはおそらく、親類だと言って阿瀬家に居座った「猜疑心の亡者ども」が家中の物を持ち去って空っぽにした後に、阿瀬家にやって来る家出した阿瀬卓見の長男だろう。まさに安部が先の「富士山のジャンヌ（仮題―長編）」構想について触れた『解体と総合』で言っていた「家出息子が戻って」きたわけだ。だが、この「新聞で、叔母さんのこと見ちゃったんで、親父がちよっと見てこいっていう」のでやって来たときKに言う「皮をむいたようにのっぺりした桃色の顔」をした「小柄な学生服の男」は、空っぽになった家を見て、相変わらず山の中腹で望遠鏡を覗いている宇然に逢いもせず、さっさと帰ってしまうのである。Kでさえ、その時「なぐらなかつたということはいつまでもよくよ思い悩ん」だような男でしかないのだ。つまり、『鏡と呼子』でも共同体の閉鎖性に風穴を開けるような人物に相応すると思われる人物は登場させても、内実をともなった人物として造形することはできないのである。事態は、『飢餓同盟』での失敗が、『鏡と呼子』で再び繰り返されているということだ。これでは、『飢餓同盟』の失敗を踏まえた長編小説の第三作とすることができないのは当然であろう。ゆえに「富

「土山のジャンヌ」は断念されたのである。

作品の最後で、Kは共同体の三角形に抗する手段と氣力を失って、「いつの間にか自分が校長と同じような意見になりはじめていることに気づいてぎくり」とし、「巨大な三角が、大きな口を開けてすぐ後ろにせまってきた」恐怖に襲われている。このままでは、Kは千見と同様、日本の共同体の枠組みの中に取り込まれていくのは時間の問題だろう。だが、いったん取り込まれてすっかり同化した後で、その内部を食い破っていくような道筋はあるかもしれない。それは、はるか遠く『砂の女』の砂の村にとらえられた男が溜水装置の研究に没頭する姿に、かすかに連なっていくのだろう。

(以下、続く)

\*本稿は、『昭和三十年代の安部公房短編作品について(一)―日本の共同体への帰属と脱出―』(『駒澤短大國文』第三十三号、平成十五年三月発行)から続いている。

#### 注

- (1) 『新日本文学』(2月号、昭和31年2月)
- (2) 昭和29年11月(映画シナリオ)
- (3) 『けものたちは故郷をめざす』については、拙稿『安部公房『けものたちは故郷をめざす』について―満州体験の対象化をめぐる―』(『駒澤短大國文』第二十五号、平成七年三月発行)で詳述した。